

生き物愛 学校を超えて



まんこのう 中高大生が集う「部活」

中学生や高校生が学校を超えて集まり、生き物について研究する「生物部」が香川県まんのう町にある。廃校になった中学校舎で、生き物へのあふれる愛を思い思いに表現している。



まんこのう香川の会員(右端)に講習をしてもらう生物部員ら。香川県まんのう町中通、飯間智子さん提供

「これまでに四つの論文を発表しています」。川で自然を研究・発信する活動を目的に設立。中学生が幼虫の形をした自作のお菓子を配る。「(本物の昆虫を入れることもある)プリンのカップに入っているのがいいね」「ふたに空気穴を開けたらもっとリアル」展示準備の傍らで、大人も交じり談笑する。あの活動日的一幕だ。この生物部はNPO法人「みんなで作る自然史博物館・香川」(みんなつく香川)の取り組みの一環。創部は2024年で、現在は県内の中学、大学の男女約10人が中心になって活動している。まんこのう香川は、県立

自分出せる仲間と「好き」を追求

もらうなど生き物好きが集まる機会をつくった。そこで知り合った生徒らが、次第に旧校舎に集まるようになった。まるで部活みたいだということとで、正式に「生物部」が誕生した。基本は月に1度、標本の作り方を習ったり、展示の準備をしたりする。社会に出てからも生き物の研究を続ける、みんなつく香川の会員も訪れ、現役部員と交流する。「仲間と出会う、(学校では)隠していた自分を現せるのが楽しい」「ここに来れば何かが起こり、相談しながら進められる」。『好き』を追求する生徒らにとって、



みんなつく香川の会員と生物部員ら。虫のかぶり物をしているのは研究員の松本慶一さん。香川県まんのう町中通

先輩研究者の支えで論文発表も

居心地のいい場所だ。時には昆虫採集の合宿に行き、論文執筆もする。これまでに、県内では珍しいウスバカマキリや生息環境が局所的なツチゴキブリ、冬場の採集例が少ないハマベゾウムシなどを採集。論文として発表した。本来、高校生までに論文を発表するのは簡単ではない。希少種だと感じても、本当に希少なものは先行研究に照らす必要がある。その点、この部には支えてくれる先輩研究者が大勢いる。高校3年の飯間湧斗さん(18)は昨年、高松市塩江町で大きなハンミョウを見かけ撮影した。これが、県内で発見記録が残っていないかった「オオツチハンミョウ」という虫だった。現場を離れてから写真を見返すと、オオツチハンミョウに見えた。悩んだ飯間さんは、大学で昆虫の研究をしていた会員にLINEで相談した。連絡を受けた翌日、先輩会員は現地で個体を採集。裏付け調査もして、県内でのオオツチハンミョウの初記録として、会員と飯間さんの共著論文にまとめた。頼れる先輩の姿は、部員らの道しるべでもある。中学3年の生徒は、関心がある鳥について探究できる高校に進む。高校3年の生徒らも大学に進学し、昆虫のことを研究したいのだという。「生物部に入って、人生変えられた」。そう言うのは、大好きなテントウムシが描かれたTシャツを愛用する高校3年の西野輝さん(18)だ。活動の一つとして、生き物について小さい子に解説する機会があった。部に入るまで、それが自分にはできなかった。将来は、子どもに生き物や環境保全の大切さを伝える仕事になりたいという。「好きなものを、好きだと伝えていけるようになればいいな」生物部に関する問い合わせはメール(minna.detsukurun@lime.plala.or.jp)。(渡辺杏果)